

お人好し転生鍛冶師は
異世界で幸せを掴みます！・2

ものづくりチートで
らくらく転生ライフ

著 かむら

Illustration: リーン

ノエル

猫獣人の少女。
持ち前の素早さを
活かして戦う。

ユレーナ

冒険者ギルドのマスター。
強者との戦闘が好き。

リム

ギルドの受付嬢。
親切でしっかり者。

シヨーマ

超不幸体質だった少年が鍛冶師に転生した姿。
女神に与えられた規格外な能力で
異世界を楽しみつくす！

ミシル

宿『みけね』の看板娘。
シヨーマとノアルに懐いている。

アルジェ

ノアルの母。
包容力と愛情に溢れる良妻。

ドレアス

獣人村の頼れる村長。
妻であるアルジェには頭が上がらない。

Characters

はじまり

日本の田舎町で育った、ただの高校生だった僕、剣持匠真は今、異世界で猫耳美少女に抱擁されている。

なぜこんなことになったのかといえば……発端は、不幸体質が高じて命を落としたことだった。

前世での僕は、花瓶をはじめとした物が落ちてくるなんてことがしょっちゅうあったり、学内でボールが顔面掛けて飛んでくることが日常茶飯事だったり。

とかく深刻な不幸体質だった。

そんなある日、僕はバイト帰りにトラックに轢かれそうな少女を見かけてしまう。

彼女を助けるために僕は身を挺して……命を落とした。

でもそれは——不幸体質は神様の手違いだったんだよね。

神達を統括する『最高神』フォルティは僕にその事実を教えてくれた上で、『異世界に転生させてあげる』って言うてくれた。

とはいえ、僕は規格外な能力を授けられてしまうと目立ちすぎてしまうし、自分で開拓していく面白みが減ってしまうかなって思っていた。

だから、僕は程々にしてほしいとフォルティに伝えていた。

でも、彼女は加減を知らなくて、物凄い職業を授けられてしまった。

まず一つ目は『鍛冶師』。

様々な素材を使って、武器や防具など、あらゆる物を作ることが出来る能力だ。

そして『魔導士』。

これは、どんな属性の魔法も高水準で使いこなせるというもの。

最後に『武神』。

これがあればどんな武器や防具もすぐ使いこなせるのだ。

こんな能力を授かってしまったから、なんだかことあるごとに目立ってしまったっている気もするけど……それはもう仕方ないって割り切った。

そんな矢先、僕は一匹の猫と出会う。

その子は魔物に追われてズタボロで……

放っておけなかった僕は、その子を助けてあげたんだ。

そしたらなんと、その子は猫じゃなくて獣人が獣化のスキルを使って変身した姿だった。

その獣人の少女こそが、今僕を抱きしめているノアル。

聞けば彼女は故郷である獣人村が襲われたところを、命からがら逃げ出してきたらしい。

早く獣人村に戻りたくとも、装備も足もない。

そのため依頼をこなしていたんだけど、そこで獣人村を襲ったのと似た魔族——ゴブリンジエネ

ラルと遭遇。

なんとか倒したんだけど、その魔物がなんと魔道具『隷属の輪』によって人間に操られていたことを知る。

とを知る。

人が魔族を操っているのだとしたら、再度獣人村が襲われる可能性がある。

『今すぐにでも村へ帰る』と言い出したノアルに、当然『僕もついていく』と伝えたら、こうして

抱きしめられてしまったというわけ。

相当嬉しかったんだな。

「ノアル、もういいかな？」

「……ん、満足」

ノアルが抱擁を解くのを待って、僕は言う。

「そうしたら、とりあえずゴブリンジエネラルの死骸を回収して、この隷属の輪についてもギルド

に報告しよう」

「……ん」

「それが済んだら、今日のところは遠出するための食料とか必要なものを買に行こう。それで、明日の早朝に出発するって感じでどう？」

「……分かった」

恐らく、ノアルは今すぐにでも故郷の村へと戻りたいと思っているのだろう。

でも、流石^{さすが}になんの準備もなく向かうのが自殺^{じさつ}行為^{こうゐ}だとは分かっていて、僕の提案に素直^{すなは}に同意してくれた。

そうして今後の方針^{ほうしん}を決めた僕達は、とりあえず倒したゴブリンジエネラルの死骸^{しかい}を回収する。

そして一応周りに他の魔物がいないかを僕は探知魔法で、ノアルは匂^{にお}いや音で確認。

結果、問題なさそうだったので、街へと戻った。

1 ユレーナさんとの戦い

街に戻ってきた僕達は、解体場にゴブリンの死骸^{しかい}を預^{あず}け、ギルドへ。

「あつ、ショーマさんにノアルさん！」

依頼の達成報告専用のカウンターには、丁度ギルドの受付嬢^{うけつけじょう}のリムさんがいた。

「達成報告、してもいいですか？」

僕が聞くと、リムさんはにっこり笑^{わら}って頷^{うなず}く。

「はい、大丈夫ですよ！」

「この依頼を解決してきました」

僕が依頼の書かれた紙を渡すと、リムさんは言う。

「では、ギルドカードもお出してください」

そうか、ギルドカードを出す必要があったんだった。

僕は慌てて懷からギルドカードを取り出して、リムさんに渡した。

ギルドカードには討伐^{とうばつ}した魔物の数や種類が自動的に記録される。

討伐依頼の時はそれを見せると達成報告が出来る、というシステムになっているらしい。

この間、異世界で最初に出会ってから世話を焼いてくれているゲイルさんに、こういう仕組みなのか聞いてみた。

なんでも、倒した魔物からは経験値^{けいけんち}——魔力に近いエネルギーのような物質が発せられるのだという。

そしてそれをギルドカードが感知して記録するという仕組みのようだ。

……正直ちゃんと理解出来ているかは怪しい。

ただ、ゲイルさんも『詳しくは知らん！　そういうものだ俺は割り切ってる！』と言っていたので、僕もそれ以上考えないことにした。

リムさんが手続きを進めてくれる。

「えーっと、ゴ布林五匹の討伐ですね……って、一人で十三匹も討伐してるじゃないですか！　えっ、しかも、ゴ布林ジェネラルも討伐したんですか？」

「はい。ゴ布林を探す中で集落を見つけたので、そこにいたゴ布林を全部倒したんです」

「す、凄いですね……？　青ランクと白ランクが出来ることじゃないですよ？」

冒険者の中にはランクというものがある。

ランクは達成した依頼や素行^{そこう}を総合的に評価された上で白、緑、青、黄、赤、紫^{むすね}、銅^{どう}、銀^{ぎん}、金、黒という順番で上がっていく。

僕は、ギルドマスターであるユレーナさんにブルーウルフという狼の魔物を四匹討伐した功績を認められ、白から一気に青に上げてもらった。

でも、ノアルは強いものの、まだ登録したばかりだったから白なんだよね。

ちなみに、冒険者パーティにもパーティランクというものがある。

そちらはパーティ内のメンバー個人のランクを平均したものになる。

僕らのパーティランクは緑。

そして、受けられる依頼はパーティランクによって決まるんだけど、自分のランクより一段上の依頼までしか受けられないんだよね。

今回受けた依頼は、青ランクの討伐依頼の中だと難易度^{なんいど}も報酬^{ほうしゅう}も中くらいだった。

「ノアルにかなり助けられました。それと、戦^{いくさ}っていて不審^{ふしん}な点がいくつかあったので報告してもいいですか？」

「はい！　もちろんです！」

「実はですね……」

僕はリムさんに、倒したゴ布林ジェネラルが魔法が付与された装備を着けていたことや、隸属の輪という魔道具を仕掛けられていたことを報告した。

あと、獣人村についてなど、ノアルの事情については、本人が拙い口振り^{つたな}ではあったが報告してくれた。

それを神妙な表情^{しんみょう}を浮かべながら聞いて、リムさんは口を開く。

「なるほど……ご報告ありがとうございます。実はここの話、同様の事例がここ数ヶ月の間にいくつか発生しているんです」

「そうなんですか？」

「はい。中には、魔物と会話をしているような素振り^{そぶ}を見せる怪しい者達^{あや}を見かけた、なんて報告もあって、ギルドでも秘密裏^{ひみつり}に調査をしています」

魔物と会話をする者達か……

もしかしたら、隷属の輪を使って何か命令をしていたのだろうか。

「近いうちにギルドでも大規模な調査をする予定ですから、今回提供してもらった情報もギルド内で共有させていただきますね」

「役立ててもらえると、こちらとしても嬉しいです」

「何はともあれ、お疲れ様でした。報酬は上乘せさせてもらって金貨三枚となります。上位種を倒したので、ランクも上がると思いますよ！」

「え、そんなにすぐ上がるんですか？」

「実績は十分ですし、ショーマさんもノアルさんも素行がいいので上がると思いますよ？ 強い力を持つ人にはなるべく難しい依頼を解決していただきたいので、ある程度のランクまではすぐに上がるんじゃないですかね」

もうランクが上がるのか。

昨日青ランクになったばかりなのに、こんなトントン拍子^{びょうし}でいいのだろうか？

まあ、ゲイルさんの所属するパーティのリーダーであるクラウスさんとミアンヌさんにもランクを早く上げた方がいいと言われたし、ここは素直に喜ぶべきかな。

「あ、それと、僕達明日から獣人国のノアルの村へ向かうかと」

「えっ、明日ですか？」

「……無茶なのは分かっている。けど、村の皆が心配」

ノアルは思い詰めた様子でそう口にした。

「そうですか……うちのギルドでも何か出来ればいいんですが、すみません。国を跨^{また}いだ問題となると、ギルドは中々動けなくて……」

「……大丈夫。村から近い冒険者ギルドがある街に早馬^{はやうま}を出したから、そこからきつと助けが来るはず」

「それならよかったです。あ、でしたら、この街の北門から獣人国へ向かう馬車が出ていますから、途中までそれに乗っていくといいかもしれませんね」

「お、確かにそっちの方が良さそうですね」

流石^{さすが}に自分達の足だけで向かうのは体力的にもしんどいので、馬車で途中まで行った方がいいだろう。

ちなみに、この世界では基本的に、国への出入りは大きな組織や貴族以外であれば自由で、面倒

な手続きなどを挟む必要はない。

セキユリテイ的に大丈夫かと思うかもしれないが、その代わりに大きな街では必ず検問が行われている。

それ故に悪いことを考えていてもそう上手くはいかないそうだ。

「何はともあれ、どうかお気を付けて行ってきたくださいね……？」

「はい、もちろんです。何よりも命あつての物種ですから、なるべく無理はしないようにします」
僕がそう言う横で、ノアルが拳を握る。

「……シヨーマはノアルが守る」

「はは、ありがとう。僕もノアルを守るよ」

「……っ。こういう時、私は無力ですね……」

リムさんがぼそつと何か言った気がしたんだけど……

首を傾けながら、僕は聞く。

「あれ、何か言いましたか、リムさん？」

「あつ、いえっ……！ 無事に帰ってくることを願ってますっ！」

「ありがとうございます」

それからリムさんに、今日の依頼の報酬である金貨三枚をもらい、ギルドを後にしようとしたの

だが――

「お、シヨーマじゃないか。丁度いいところに！」

ギルドの二階からユレーナさんが下りてきて、僕に声をかけてきた。

「あ、ギルドマスター！ 仕事は終わったんですか……？」

「ああ！ ちゃんと終わらせてるから安心しろ！」

ユレーナさんはリムさんの問いに笑顔でそう答えると、僕達の方へと歩み寄ってくる。

「お疲れ様です、ユレーナさん」

「ああ、ようやく溜まった仕事が片付いたよ」

「はは、それは何よりですね。あ、ノアル？ この人はユレーナさん。このギルドのギルドマスターだよ」

僕がギルドマスターと会ったのは、まだノアルとパーティを組む前だったから、軽く紹介していた。

ノアルはそれを聞いて、軽く頭を下げる。

「……ギルドマスター。よろしく」

「おつ、よろしくね。シヨーマがパーティーを組んだって話はさっき聞いたが、中々出来そうじゃないか」

強者は相手の力量を雰囲気とかから測れる……のかな？

いや、今はそんなことどうでもいいな。

それより、さつきユレーナさんが口にした『丁度いいところに！』という言葉の方が気になる。

「それで、何か僕に用事があるんですけど……？」

「おお、そうだったそうだった。この前約束したこと、覚えてるか？」

「この前、というと模擬戦の話ですかね？」

「そうだ！ 今からやらないか？」

「んー、そうですね……僕は構いませんよ。ノアルはどうする？」

「……付いてく」

「よし、決まりだな！ それじゃあ訓練場へ行こう！」

「分かりました。リムさん、ギルドカードは預かってもらっていいですか？」

「はい、もちろんです！ ギルドマスター？ 程々にしておいてくださいよ？」

「分かってる！」

そんなわけで僕達は、ギルドの地下へと向かうことに。

訓練場は、地下にあるようだ。

「いやー、仕事を早く終わらせた甲斐があったよ！ 誰か相手がいなかったら下まで下りてきたんだが、ショーマがいてくれてよかった！」

「僕でよかったんですか？ 他にも強い人はいるんじゃない？」

「いるにはいるが、折角なら戦ったことのない奴とやりたいだろ！」

うーん、ちょっと僕には分らないが……

ユレーナさん、思ったよりも戦闘好きみたいだ。

そう思っていると、ユレーナさんはノアルに視線を向ける。

「あんたもやるかい？ こちらとしては大歓迎だが」

「……ん、やる」

お、意外とノアルもやる気だ。

「よし、着いたよ。ここが訓練場だ」

「広いですね」

「……おー」

訓練場は結構広い。

まさかギルドの地下にこんな広大なスペースがあったとは。

そんなふうに感心していると、ユレーナさんが説明してくれる。

「この訓練場の壁は魔力を通さないから、魔法も撃てるぞ。物理攻撃でも簡単には壊れないから、ある程度全力で戦える」

「なるほど……凄いですね」

「よし、じゃあ早速やろうか？ 魔法もありでいいぞ？ アタシはほぼ使えないがな」

ユレーナさんが魔法を使えないとは初耳だ。

僕だけが魔法を使えるなんて、大分有利に思えてしまう。

「いいんですか？」

「ああ。全力でやらないと面白くないだろう？ 行動不能になるか、降参したら負けっていうルールでいいか？」

「分かりました」

何気にこの世界に来てから初めての対人戦だな。

僕は息を吐いて集中力を高めながら、訓練場の端に移動し、対面の端にいるユレーナさんに向かい合う。

正面に立つユレーナさんは、いわゆるシャムシールと呼ばれるような曲刀を無造作に構えている。

僕もロングソードを構え、魔法をいつでも放てるよう、準備しておく。

今回は、ノアルが審判を務めてくれることになった。

僕とユレーナさんがノアルに向かって頷くと――

「……始め」

ノアルの開始の合図と共に、ユレーナさんが突っ込んでくる……って、速っ！

三十メートルくらいは離れていたのに、もうユレーナさんは十五メートルくらいの距離にいる。

「『ロックバレット』――」

慌てて僕は魔法を唱え、小さな土の弾丸をいくつも発射した。

これであかつには近づけないはず……

そう思っていたのに、ユレーナさんは目にも留まらぬスピードで曲刀を振るい、自分に当たりそうな土弾だけを叩き落とす。

「ふっ!!」

そして、そのままスピードを落とさず突っ込んできて、僕目掛けて剣を振ってきた。

僕はそれをロングソードでいなそうとしたんだけど……重い！

バランスを崩しかけてしまう。

「くっ!？」

「ほらほら！ 攻めないと勝てないよ！」

その後も凄まじいスピードで剣を振ってくるユレーナさん。

このままだと、受け切れない……！

そう思った僕は、バックステップでユレーナさんの剣を紙一重で避けると同時に、その方向に魔法で風を起こす。

『ウィンド』！

その処理にかかずらっている隙に距離を取ろうと考えてのことだった。なのに、それすら曲刀を一振りするだけで消え失せた。

「ほー、面白い魔法の使い方だね。いいじゃないか！」

いや、この人強すぎる！

どうする!?

このままだと、何も出来ずに終わる！

「遠慮してるね？ そんなんじゃアタシを止められないよ！」

遠慮だなんてとんでもない！

魔法は効かない、剣でも勝てない。

ならどうする？

本当に手詰まりか？

他に何か手はないか？

……ダメだ、何も思いつかない。

とりあえずは時間を稼がなくては……！

『ファイアウォール』！

炎の壁を作り出した。

火魔法は使わないつもりだった。

土魔法と比べて相手を怪我させる可能性が高いからだ。

でも、ここまで戦って分かった。

恐らくこの人なら歯牙にもかけないだろう、と。

『ロックウォール』！

火の壁の後ろに土の壁を作り出した。

流石のユレーナさんも足を止めた。

でもそれだつて数秒で打開されてしまうに違いない。

その数秒の時間の中で、どうにかして一矢報いる方法を考えなくては。

魔法も剣も効かないユレーナさんに一撃を入れるためには、どうにかして意表を突かないと……

何か手はないか……!?

「ハアアッ!!」



ユレーナさんの裂帛^{れつぱく}が聞こえた。

ほぼ同じタイミングで、壁に何かがぶつかる音がする。
なんだなんだ!?

僕が壁の横から少しだけ顔を出し、ユレーナさんの方を見ると、ファイアウォールが跡形もなく消え去り、ロックウォールにも大きな亀裂^{きれつ}が刻^{きざ}まれていた。

ユレーナさんは、さっきの位置から動いていなかった。

ただ、剣を振り抜いた体勢でこちらを見ていた。

もしかして、斬撃^{ざんげき}を飛ばしたの!?

飛ばした斬撃でファイアウォールを消し去って、ロックウォールにもダメージを与えたのかこの人!?

「降参^{こうさん}かい?」

驚^{おどろ}いてる僕を見て、ユレーナさんが曲刀で肩をトントンしながらそう聞いてくる。

……確かに、悔^くしいがこの人には今の僕じゃあ勝てないだろう。

けど、最後までやれることはやるべきだ。

「いえ、まだです!」

「お! いいねえ、最後まで楽しませておくれよ!」

なんとかして一矢報いてやる！

*

「参りました……」

ユレーナさんと戦い始めてから約十分後。

結局僕は、大した反撃も出来ずに負けてしまった。

途中、風魔法で強化したロックバレットが数発ユレーナさんの服を掠めたくらいで、ユレーナさんはほとんど無傷だ。

「いやあ、中々楽しかったぞ！ 普通に強いじゃないか、シヨーマー！」

「いや、ほとんど何も出来なかったんですけど……」

「そんなことないぞ？ 大半の奴は最初の立ち合いで降参しちまうから、ここまで長く戦えたっただけでも十分だ！ 何発か危ないのもあったしな！」

「僕としては、ユレーナさんが予想を遥かに上回る程に強かったので驚きました。金ランクの冒険者って、皆さん、ユレーナさんくらい強いんですか？」

「んー、人によるんじゃないか？ 近距離の攻撃手段しか持たない相手だったらアタシは負けなし

だが、たとえばミリーと広い場所でもなんでもありの勝負になったら、大規模魔法で吹っ飛ばされるかもな。まあ、簡単に負ける気はしないがね！」

大規模魔法に対しても、対抗手段があるのか……

とんでもないな。

「それで、ノアル？ アンタもやるかい？」

「……ん！ お願ひする。シヨーマ、剣出して」

「分かった。一応怪我には気を付けてね」

「……ん、了解」

僕はアイテムボックスからノアルの双剣を出して手渡した。

抜き身の剣を持ったまま移動するわけにはいけないので、基本的にノアルの双剣は僕のアイテムボックスにしまつてある。

ノアルはそれでもいいのかもしれないけど、依頼の時とかはいつ戦闘になるか分からない。

装備出来るように、今度鞘とか作ろうかな？

そんなことを考えつつ、審判を務めるべく、僕は先程ノアルがいた位置に移動する。

全員が所定の位置についたタイミングで、ユレーナさんが言う。

「よし、じゃあやろうか！ 遠慮なくかかっておいで！」

「……ん！」

「それじゃあ、いきますよ……始め！」

僕の合図で二人の試合が始まった。

*

「あ、シヨーマさん！ 大丈夫でしたか？」

模擬戦を終え、僕は受付にいるリムさんのところへ戻ってきた。

「大丈夫ですよ、リムさん。とてもいい経験が出来ました」

「……負けた」

耳と尻尾^{しっぽ}をへにやつとさせながらそう口にしたノアルに、ユレーナさんは笑いながら言う。

「はは、ノアルも強かったぞ！ 近接戦闘だけならシヨーマよりも強いな！」

そう、ノアルもユレーナさんには勝てなかった。

試合時間は僕よりも短かったが、剣戟^{けんげき}の回数自体は僕よりもかなり多かった。

とにかく二人共動きが速くて、ちょこちょこ何をしているのか視認出来ない瞬間もあったくらいだ。

それにしても、やはりユレーナさんは凄い。

試合を終えて、『八割くらいは全力を出した』と言っていた。

それだって本当かどうかとてところだから、底が見えない。

でも、そんなユレーナさんのお墨付き^{すみつき}をもらえたことは、ノアルの近接戦の戦闘力は相当なものを見ていいだろう。

「じゃあ、僕達はこのあと色々と準備があるので、行きますね」

「準備？ どうか行くのかい？」

そう聞いてきたユレーナさんに、ノアルのために獣人国へ行くことをざっくりと説明した。

「ふむ……そうか。とりあえず、気を付けて行くんだよ。最近、森の様子がおかしいからね」

「はい、しっかり準備して行こうと思ってます」

「まあ、お前さん達ならそうそう負けないとは思うがね。実力はアタシが保証してあげよう」

「はは、ありがとうございます」

2 準備

それからユレーナさんとは、また今度模擬戦をするという約束を交わして解散。

続いて、ギルドの近くにある解体場にゴブリンの素材代をもらいにいくことにした。

そこでは持っていた魔物を解体した上で買い取ってくれるのだ。

解体場の責任者——グラッドさん曰く、普通のゴブリンの素材はそこまでの値段にならず、体内にある魔石が売れるくらいらしい。

魔石とは、魔物の心臓しんぞうに当たる部位で、魔力を蓄たくわえたり放出したりする性質がある。

魔道具の核かくに使われることが多いそうだ。

魔石を売るかもらうか……迷ったけど、価値が高いゴブリンジェネラルの魔石はもらっておくことにした。

武器作りに使えるかもしれないしね。

自分で試してみても、ダメだったらまた売りに来ればいいだろう。

その他の素材代は全部で金貨一枚になり、依頼の報酬金と合わせて計金貨四枚を手に入れること

が出来た。

冒険者デビューしたてにしては稼げた方なんじゃないだろうか？

「よし、報告も済んだし、色々必要なものを買に行こうか」

「……んっ」

「お、ショーマ達じゃねえか」

僕達が解体場を出ようとしたタイミングで、同じように解体を頼みに来たのか、ゲイルさんとバツタリ鉢はち合わせした。

「ゲイルさん、お疲れ様です」

「おう、ショーマ達もな。依頼はどうだった？」

「依頼自体はつつがなく終わりましたよ。ただ、少しイレギュラーなことがありましたね」

「イレギュラー？」

ゲイルさんも近頃の異常について何か知っているかもしれないので、僕は今回の依頼の中で起きたことをゲイルさんにもざっくりと話してみた。

「ゴブリンの集落か。普通は森の入口近くには作らないはずなんだが、最近多いな」

「そういう異常を最近ちよこちよこ耳にするってリムさんからも聞きました」

それから僕は、獣人村へ行く予定であることも話す。

すると、ゲイルさんは神妙な顔つきで口を開く。

「お前達、獣人国に行くのか」

「そうですね。明日の朝一で馬車に乗っていくつもりです」

「気を付けろよ？ 遠出では何が起こるか分からないからな。まあ、お前は元々旅人だったから、慣れっこかもしれないが」

「え？ あ、ああ、そうですね」

「そういえば僕、そんな設定だったな……」

『別の世界から転生してきました！』なんて言ったら目立ちすぎること請け合いだと思って、そう言い訳をしたんだよね。

「特に森には用心しろよ。……これはなるべく秘密にしておいて言われたんだが、お前らには言っておいた方がいいな」

「……なんですか？」

ゲイルさんは、周りに聞いている人がいないか確認をしてから話し始めた。

「……森の異変なんだが、どうにも人為的に起こされているみたいだ」

「それは……どういことですか？」

「一週間前くらいに、近くのダンジョンにこの街を拠点にしてる獣人のパーティーが行ったらし

い。その時、森の中で怪しい人間が複数人まとまって、何やら魔物に指示を出していたのを見たそうだ」

「あー、隷属の輪を使って、ですかね？」

「お、知ってるんだな？」

「実は、今日倒したゴブリンジェネラルにも着いてました」

「マジか。……で、そんな怪しい連中を見過ごすわけにもいかんから、獣人のパーティーが接触を試みたら、連中はそれはもう全力で逃げたらしく、捕まえることは出来なかったそうだ。けど、魔物の方はちゃんと倒して、持ち帰ってみたら、その魔物に隷属の輪が着いてて、存在が露見したって話だ」

「なるほど……」

「ギルドも今、色んな手段で出所を探っているらしい。だから、森を抜けるとなるともしかしたらそういうのに遭遇するかもしれないから、気は抜かない方がいいぞ」

「分かりました。ご忠告ありがとうございます」

確かに、獣人村に辿り着くまでもまた今回のゴブリンジェネラルのような魔物に遭遇する可能性は十分にある。

気を引き締めていかないと。

「あ、そうだ。ゲイルさん。遠出するために必要なものを売っている店ってありますか？」

「ん？ ああ、それなら道具屋に行けば色々べんりと便利なもの売っていると思うぜ？」

「道具屋ですか？」

「ああ。向こうの通りにあって、冒険に役立つものとか、割となんでも置いてあるぜ。……ただ、お前なら自分で作れるんじゃないか？」

ゲイルさんは周りに聞こえないよう、小声で僕にそう言ってきた。

「自分で、ですか？」

「ああ。道具屋には魔道具も置いてある。たとえば、魔物に見つかからないための結界を張る石とか、寝るだけで体力が回復する寝袋ねぶくろとかがある。寝袋はともかく、結界を張る石くらいならお前でも作れるんじゃないか？ 確かあれも効果付与されたもんだったと思うぜ」

「なるほど……もしかしたら作れるかもしれませんね。とりあえず、道具屋に行って色々と見てみようと思います」

「それがいいな。あとは食料もしっかり準備していった方がいいぞ。うちのパーティーで遠出する時はミリーが収納魔法を使えるから、あらかじめ作っておいた食べ物を保管しておいてもらって、必要になったらその都度出してもらっている。シヨーマも収納魔法、使えるだろ？」

「それはいいですね。教えてくださりありがとうございます」

「相変わらず硬かたえなあー。気にすんなって！ とにかく気を付けて行けよ？ 帰ってきたら向こうの様子とか教えてくれや！」

「もちろんです」

快く色々いろいろと教えてくれたゲイルさんとは一旦そこで別れ、僕達は教えてもらった道具屋へと向かう。

その道中に、獣人村へ行くに当たっての打ち合わせをする。

「馬車を使ったら、どれくらいで着くだろう？」

「……何事もなく行けば、二日もかからないと思う。私があっちこっち行きながらここまで来るのに、三日くらいかかったから」

ということとは、少なくとも確実に一日は野宿のじゆくすることになるのか。

一応、手持ちはそれなりにあるから、十分必要なものは買い揃そろえられると思う。

何かあるか分からないし、食材をはじめとした日用品は少し多めに買っておくべきだろう。

「道具屋はあっちか。途中に市場もあるから……先にそっちに行ってもいい？」

「……もちろん」

「ありがとうございます」

ということで、この前立ち寄った市場に足を向ける。

まず食料を買いたいし、もしこの間行った鉱石屋に酸化鉄があったらもらいたい。

前回は処分費用が浮くからってタダでもらえたんだよね。

普通の人だったら使い道がないような酸化鉄でも、合成・分離スキルを使えば武器作りに使う部分とそれ以外を仕分けられるのだ。

「よし、着いた。とりあえず食材から買おうかな。すぐに食べられるものを作りたいから、それ用の食材を……」

「……シヨーマ、料理出来るの？」

「ああ、うん。ララさん程ではないけどね。家庭料理くらいは作れるよ」

「……そうなんだ。シヨーマの料理、楽しみ」

そう言うノアルは、耳をピコピコ、尻尾をゆらゆらと揺らして、期待のこもった表情を向けてくる。

あんまり期待されると、好みに合わなかった時に困るんだけど……

まあ、美味しいって言うってもらえるよう、頑張らなきゃな。

そう密かに決心した僕は店に行き、色々な食材を手に入れた。

改めて見てみると、この市場で売っている食材はどれもかなり安い。

予算いっぱい買ってみたところ……余裕で二週間くらいは持ちそうな量の食材を買うことが出来た。

ちなみに、野菜や果物は見たことのあるものを中心に、少しでも見たことのないものも買ってみた。

白色のピーマンっぽい奴とか、トゲトゲしたにんじんっぽい奴とか。

それと、肉類は主にお店の人に勧められた、魔物の肉を色々買ってみた。

なんでも、僕が見たことのあるような家畜の肉よりも、断然魔物の肉の方が美味しいんだそう。

あとは、主食としてパンと乾燥パスタ、他にも牛乳やチーズなどの乳製品や小麦粉と片栗粉も手に入れた。

そして最後に、砂糖、塩、酢、醤油、味噌といった、いわゆる『料理のさしすせそ』と呼ばれる調味料に加えて、油や料理酒、胡椒にハーブなんかも少しずつ買っておいた。

うん、これだけあればなんだって作れそうだな。

久しぶりにこういう買い物をしたから、つい夢中になってしまった。

珍しい食材も沢山あったし、安かったし。

「ごめんね、ノアル。時間がかっちゃって」

「……大丈夫、ノアルも楽しかった」

よかった、退屈^{たいくつ}はしてなかったみたいだ。

そうして食材を買い終えた僕達は、今度は同じ市場にある、以前鉱石屋があつた場所に向かった。市場の店は入れ替わりが激しいイメージがある。

また店を出していただいたいなと期待しながら足を運んでみたんだけど……そこには以前と全く同じ鉱石屋が店を構えていた。

ノアルは鉱石を見てもよく分からないので、近くの他の店を見て回つてるとのこと。

一旦別行動である。

「おはようございます」

「おう、いらつしやい……つて、この前の兄ちゃんじゃねえか！」

「ご無沙汰^{ぶさた}します。今は営業中ですか？」

「ああ、もちろんだ。なんか買っていくかい？　うちの商品は量も質もしっかりしてるぜ！」

そんなふうにつてくれた店主に感謝をしつつ、僕は店内を見て回る。

ちなみに、この人はジストンさんというそうだ。

今後もお世話になるかもしれないので、名前を聞いてみたのだが、快く教えてくれた。

店主——もといジストンさんに頼んで、まずは鉄鉱石を金貨二枚分用意してもらった。

量で言うと、合成・分離のスキルを使つてよりよい部分だけを抽出したら、僕が使っているロン

グソードを五本作れるくらいだ。

そういえば、地球では鉄鉱石つてどのくらいの値段なんだろうか？

金貨二枚⇨二万円と考えると、結構お得な気がするのだが、聞いてみるか。

「僕の場合は、このお店の商品はかなり安く感じるんですけど、鉱石つてどこから仕入れてるんですか？　……あ、もちろん言いたくなかったら結構ですよ」

「いや、別に言っても問題はないぞ。鉄鉱石とか銀とか金、あとよく仕入れるものと言うと、ミスリルとかか。そいつらは色んな国の鉱山から採掘されるんだ。それぞれ色んな所から仕入れてるぞ」

「そうなんですね」

「ただ、鉱山だけじゃなくてダンジョンからも鉱石は入手出来るからな。そこでも鉄鉱石とかは取れるし、なんなら面白い効力がある鉱石も手に入る。そういうのが取れるダンジョンは重宝^{ちゆうほう}されるぜ」

「なるほど。このお店だけでもかなりの量と種類がありますけど、枯渴^{こかつ}しないんですか？」

「鉱山の鉱物は枯渴することはないでもないが、ダンジョンの鉱石が枯渴したつて話は聞いたことないな。それに、そういうダンジョンには、鉄やらミスリルとかで出来たゴーレムつて魔物もいるらしいから、この世界から鉱石がなくなるなんてことはないんじゃないか？」

ミスリルで出来たゴーレムなんているのか。

ひよっとしたら、ダイヤモンドで出来たゴーレムとかもいるのだろうか？

地球にいたら争いが起きそうだな。

「色々聞かせてくださり、ありがとうございます。ところで、この鉱石はなんですか？」

「それは浮空石^{ふくうせき}だな。魔力を込めると宙^{ちゆう}に浮くんだよ」

ジストンさんはそう言うと、浮空石を手にとって、魔力を流して宙に浮かせてみせた。

おおー、本当に浮いてる。

「こんな感じで魔力を操作すれば上下左右、自在に動かせるぞ。魔力の量次第で飛ばせる時間が増えるが、俺みたいな一般人の魔力量だと、全力で魔力を込めても十分くらいが限界だな」

僕は身を乗り出して、聞く。

「面白いですね。用途としてはどんなものがあるんですか？」

「それがなー、この鉱石が発見されたのはつい最近で、まだこれといった使い道は分かってないんだよ。武器にするにしても鉄より脆^{もろ}いし、仮に武器にしたとしても、動かすにはそれなりの魔力がいるから、魔法使いじゃないととてもじゃないが使えない。かといって、魔法使いでさえ、『それを使うくらいなら杖を使う』って感じでなあ」

「なるほど……」

「魔道国家の研究者や鉱山国家のドワーフが試行錯誤^{しこうさくご}するために大量に買っていたこともあったが、最近見つけられたダンジョンでかなりの量が取れるもんで、需要^{じゅよう}が減って売れ残っているのが現状だな」

武器として使えない、か……

本当にそうなんだろうか？

この鉱石を見て、色々アイデアが浮かんできたんだけどな。

浮空石だけにつてね。

「ジストンさん、その浮空石を買いたいんですけど、おいくらですか？」

「お、なんだ興味^{きうみ}が湧^わいたのか？ 兄ちゃんは相変わらず用途がよく分かんものばかり欲しがるなあ」

「はは、そうかもしれないですね」

「値段は鉄鉱石の半分でいいぜ。ここにあるの全部買うのか？」

「はい、買わせてもらいます。あ、こっちの鉱石はなんですか？」

「それは色石^{しきせき}つって、主にアクセサリーとかに使われるもんだな。これも買うかい？」

「んー、それでは、一つずつください」

「それなら、浮空石と合わせて金貨一枚でいいぞー！」

取引を成立させた僕は、言われた通り金貨一枚を払い、かなりの量の浮空石と色石を手に入れた。ちなみに色石は、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色がある。

これを買ったのは、武器に色を付けられないかなーと思ったからだ。

分離スキルで色素が強い部分だけ分離させて、武器に合成すればいい感じになりそうな気がする。今使っているロングソードは綺麗な銀色で悪くはないが、サブカル大好き人間の僕としては、ゲームや漫画に出てくるようなカラフルな武器にちよつと憧れがあるのだ。

「何に使うかは知らないが、なんか面白そうなものが出来たら見せてくれよ！　そんでもって、またうちの店で色々と買ってくれ！」

「分かりました。また来ますね」

そう最後に言って、僕はジストンさんの店を後にした。

ノアルは僕が鉱石屋を見ている間、近くの店にいて言っていたけど……
お、よかった。

丁度道の反対側の出店にいたノアルに近づくと、何やら熱心に商品を見ていた。
僕の接近に気付かないくらいに。

「何か、気に入ったものあった？」

「!?　……びっくりした」

「あはは、ごめんごめん。何か凄く熱心に見てたね？　気に入ったの？」

「……綺麗だから見てた。けど、ちよつと高い」

ノアルが見ていた商品は、綺麗な色や形状をした、指輪やネックレス、ブローチなどの装飾品だった。

その中でも、ノアルが一番興味を惹かれているのは、指輪のようだ。

やっぱり女の子だから、こういう綺麗なものに惹かれるんだなあ。

でも、確かに少し値が張るものばかりだ。

とても質が良さそうではあるから、妥当な値段だとは思うが。

「……シヨーマは終わった？」

「うん、待たせてごめんね？　ノアルは何か買う？」

「……大丈夫。次は道具屋？」

「そうだね。それじゃあ、行こうか」

「……ん」

そうして市場での買い物を済ませた僕達は、次の目的地である道具屋へと向かう。
少し歩いたところに、その道具屋はあった。

かなり大きい二階建ての店舗で、一階と二階でそれぞれ用途の違う商品が売られているみたいだ。
「いらつしやいませ。冒険者の方ですか？」

早速お店の中に入ると、すぐに若い女性の店員さんが声をかけてきた。

「はい、そうです。明日から少し遠出しようと思っっているので、色々揃えたいと思って」

「そうですか。こちらに店内の見取り図があるので、お目当ての品を探す参考になさってください。
何かご不明な点がございましたら、私共に声をかけてくださればいつでも対応いたします」

「ご丁寧（ていねい）にありがとうございます。色々と見させてもらいますね」

「はい。どうぞ、ごゆっくり」

うん、いい店だな。

店員さんの対応（たいおう）然（しか）り、店内の雰囲気（ふんいき）もいい感じだ。

「それじゃあ、色々と見て回ろうか。ノアルも何か欲しいものがあつたら教えてね？」

「……ん、了解」

それから僕達は店内を歩き回り、必要そうなものを手に取っていった。

毛布（もうふ）やタオル、鍋（なべ）やフライパンにスプーンやフォーク、大小様々なお皿。それに、寝袋や雨を凌（しの）ぐための組み立て式の屋根まで売っていたので、それらをまとめて購入することにした。

屋根に関しては僕も作れるかもしれないが、作るのに沢山の材料がいるだろうし、大きいものを

作るとなると、それなりに魔力が必要だ。

値段もお手頃だったし。

あとは、何かと使えるような無地の布を何枚かと、裁縫（さいほう）道具を一式買っておいた。

これがあれば、服が戦闘とかで破れても直せる。

そういえば、裁縫も家事スキルの補正が入るみたいだけど、どうなるんだろう？

僕は、家事スキルのレベルも高いんだよね。

手際（てぎさ）がめっちゃ良くなるのかな？

そんなことを思いつつ、一階で手に取ったものを一旦お会計してもらった。

値段は締（し）めて、金貨四枚程だった。

大分お買い得なんじゃないかな？

地球とはやっぱり相場が変わってくるんだろうか。

寝袋とか屋根とか、地球で買ったらそれなりの値段がしそうなものばかりだけど。

「二階は……魔道具を売ってるのか。行ってみる？」

「……んっ」

二階は、一階より少し狭い。

そこに、魔道具がぎゅうぎゅうに並べられていた。

それらの魔道具の前には値札と、どんな効力があるのかだったり、使う際の注意点などがざっくりと書いてある。

そんな魔道具達を色々と見て回っていると、先程ゲイルさんが言っていた結界石を見つけた。使い方は……セッパで売ってる台座に球体の結界石を置いて、それを結界を張りたい範囲の四隅よすみに置き、魔力を流すことで起動するらしい。

結界の広さによって消費魔力が変わってくるみたいだ。

こっそり鑑定かんていしてみると、認識妨害にんしきぼうがいという効果が付与されていて、結界の範囲内の人間は外からは認識されず、何もない普通の風景に見えるそう。

確かに夜寝る時とかは便利だけど、値段は金貨五枚とかなり高めだ。

なので、僕はステータス欄らんを開いて、認識妨害の付与が出来るか確認してみる。

どうやら、僕でも付与出来るみたいだ。

なら、これは買わずに自分で作ろう。

「……シヨーマ、これどう？」

「ん？ 何それ？」

手に取っていた結界石を棚に戻していると、ノアルが何かを見つけたようで声をかけてきた。

その視線の先には、そこそこ大きめの、三人くらいは余裕をもって寝転べじゅうたそうな絨毯じゅうたんがあった。

えーっと、なにになに……

ほう、防汚ぼうおの付与がされているのか。

「うん、いいかもね。値段もそこそこだし、買おうか」

「……ん！」

こちらの値段は金貨三枚だった。

この大きさを、付与もしてあるなら妥当なところだと思う。

確かめていないが、多分防汚の付与も僕は出来るので、適当な絨毯を買って同じようなものを作れると思う。

でも、ノアルはこの絨毯の模様や色が気に入ったみたいなので、これを買うことにした。今から絨毯が売っている店に行くのも面倒だしね。

そんなこんなで、この絨毯も店員さんに会計してもらって、アイテムボックスにしまっておく。

そういえば、アイテムボックスにホイホイ色んな物入ってるけど、容量とかは大丈夫だろうか？ いっぱいになった気配は今のところないのだけれど……

まあ、いっぱいになった時に考えればいいかな。

道具屋から出たところで、既に夕方の一歩手前くらいの時間になっていた。

「それじゃあ、宿に戻ろうか。他に買っておきたいものとかあるかな？」

「……十分だと思う」

「そっか。それじゃあ戻って、明日からのご飯を作っておこう」

「……ん、楽しみ」

*

現在、買い物を終えて泊まっている宿『みけねこ』に戻ってきたわけだが、宿の前で僕はとあることを思い出した。

「ミルドさん達にどう説明しよう……」

そう、今朝のノアルは黒猫だったが、今は獣人の姿なのだ。

というか、そもそもこの宿に獣人は泊まっているのだろうか？

ノアルの話では、ダメな宿もあるらしい。

悲しいことにこの世界では、獣人に対する差別感情を持つ人もいるのだ。

「……獣化する？」

「いや、獣化は魔力を使うんでしょう？ 早いとこ魔力を回復させたいだろうし、その姿でもし泊まっちゃダメって言われたら別の宿を探そう」

「……ごめんなさい」

「謝らないで。ノアルは悪くないんだから」

「……ん」

「それじゃ、行こうか」

不安からか、ノアルは僕の服の裾すそを掴んで、僕のすぐ後ろを付いてくる。

「あ、ショーマさん、お帰りなさい」

「ただいま戻りました」

そのまま宿に入ると、迎えてくれたのは、この宿の従業員のソーイさん。

もう一人の従業員のトーイさんとは、双子ふたごの姉妹らしい。

ちなみに、髪型がロングとショートで大きく異なるために見分けがつくが、それ以外はそっくりである。

「あれ、その子は？」

「あー……この子を見た通り獣人なんですけど、この宿って獣人は泊まっちゃダメとかありますか
ね？」

「大丈夫だと思いますよ？ あまりないですけど、獣人の方や魔族の方なんかこの宿には泊まったことありますし、他の従業員の皆さんも、獣人がダメとかはないです。他のお客さんが嫌だと

言っても追い出すなんてことは絶対にしません！」

「そうですか、それを聞いて安心しました」

よかった、宿を変える必要はないみたいだ。

最悪、森の方で野宿かなーとも思っていたので一安心。

「お、ショーマじゃないか。どうした？」

そんな僕達の話し声を聞きつけたのか、宿の主であるミルドさんが受付の奥のスペースから顔を出してきた。

「あ、ミルドさん、えつとですね……」

僕はソーイさんに聞いたことを、念のためもう一度ミルドさんに尋ねてみた。

すると、ソーイさんの言った通り、全く問題はないとのこと。

加えて、昨日助けた黒猫がノアルだったことや、今朝はこの宿がもし獣人NGだった時のために獣化していたことも告げた。

「なるほどな。うちの宿は基本的に種族によっては泊まれないってことはないぞ。なんでも、この宿を最初に作った人……俺の曾祖父が猫の獣人だったらしくてな。そういう理由もあって、獣人に対してはちよつと親近感があるくらいだ」

「そうだったんですか」

だから宿屋の名前もみけねこなのかな？

その曾祖父は三毛猫の獣人だったとか？

「それで、そいつも泊まるってことでいいのか？」

ミルドさんの言葉に、僕の後ろに隠れていたノアルはこくと頷く。

「……ん、泊まる。それと、ありがとう」

「ん？ 何がだ？」

「……ノアルが倒れている時に面倒を見てくれたって聞いた。だから、ありがとう」

「ああ、そのことか。気にしなくていい。元気になったみたいでよかったな」

「……ん」

ノアルはミルドさんにそうお礼を言うと、僕の後ろから出てきて控え目な笑みを浮かべた。それを微笑まし気に見てから、ミルドさんは言う。

「そういえば、ショーマは最初に三分分の宿代を払っていたが、これからどうすんだ？」

「実は、明日から少し遠出をすることになりまして、泊まるのは一旦今日までですね」

「そうなのか。戻ってくるのか？」

「そのつもりです」

「そうか。気を付けてな」

「ありがとうございます」

一旦話がまとまったのを見て、ミルドさんはノアルに水を向ける。

「で、ノアルはどこに泊まるんだ？」

「あ、じゃあ新しい部屋を——」

「シヨーマと一緒に部屋がいい」

僕の言葉を遮って、ノアルはそう口にした。

一緒に部屋、だって!?

「えっ!? 良くない!？」

「……ただでさえ、必要なものを沢山買ってもらったから、これ以上私のためにお金を使ってほしくない」

「い、いや……でも……」

決めかねている僕を横目に、ミルドさんはノアルに聞く。

「なんだ、一緒に部屋でいいのか？」

「……ん、いい」

「なら、ノアルの分の代金はサービスしてやる。一泊だけだし、シヨーマはミラルのことを構ってくれたからな」

僕が狼狽^{うろた}えている間に、あれよあれよと一緒に部屋に泊まることが決まってしまった。

ま、まあ、道具屋で寝袋も買ったし、僕はそれを使って床^{ゆか}で寝ればいいか……

3 料理を作ろう！

「よし、じゃあ料理しようか」

「……おー」

部屋^{むい}決めで一悶着^{いちもんちゃく}あったが、気を取り直して僕とノアルは、明日からの食事を作るために、みかねこの厨房^{くわうぼう}を借りた。

ミルドさんの奥さんであるララさんは買い物に行っていて留守にしていたので、ミルドさんに厨房を借りていいか聞いたところ、思っていたよりもあっさりオーケーをもらえた。

なんでも、あらかじめご飯を用意してから依頼に行く冒険者も多くはないが、いるにはいるらしく、使った調理器具などを最後に洗って片付けてくれれば使っていいんだとか。

「ちなみに、ノアルは料理出来る？」

「……あんま出来ない。けど、何か手伝いたい」